様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ９ 月 ２８ 日現在

機関番号：１４２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７５０２９１

研究課題名（和文）イギリス併合下アイルランドにおける近代スポーツに関する研究

研究課題名（英文）The Study of Modern Sports on Ireland in the Mid 19th Century

研究代表者
榎本　雅之（Enomoto, Masayuki）

滋賀大学・経済学部・准教授

研究者番号：４０５１５９４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は19世紀半ば、対英国の民衆運動が活発化する時期に着目し、英国近代スポーツのアイルランドへの定着過程とナショナル・スポーツを統括するGAAのスポーツ活動の実相について検討した。アイルランドのエリート層はダブリン大学式のフットボールをプレーしていたが、イングランドとの国際試合を行うために、ラグビーユニオンのルールを受け入れ、それが公式なルールとしてアイルランドに定着する。また、1884年に設立されたGAAは、英国式の近代スポーツの運営方法を取り入れ、アイルランドのナショナル・パスタイムズを近代スポーツへと作り変えた。

研究成果の概要（英文）：　This study considers the influence of modern British sport on Irish sports history and the organization of the Gaelic Athletic Association. The GAA, which has control of national sports such as hurling and Gaelic football, sought to increase grassroot activities between the nations in the mid 19th century.

The elite class of Ireland had previously established and drafted original football rules developed at Trinity College, Dublin, based on the playing rules used by the Rugby School in England. Later to play international matches with the English national team, they adopted the rules used by the Rugby Football Union, that then became widely used in Ireland.

The GAA, which was founded in 1884, introduced club management and sports meeting protocol based on modern British sport, which in turn modernized traditional Irish sport.

研究分野：スポーツ科学

キーワード：アイルランド　近代スポーツ　フットボール　エリート層　ラグビー　ゲーリック・アスレティック協会

１．研究開始当初の背景

英国で誕生したクリケットやラグビーなどの近代スポーツは、19 世紀半ばにアイルランドに伝播し、英国からの入植者やアイルランドの上流階級の人々によって行われていた。彼らが行うアスレティック大会は、アイルランドで非常に人気のあるスポーツイベントとなっていたが、階級によって参加の制限を課すアマチュア規定のため、一般的なアイルランド人は参加することができなかった。こうした状況を解決し、また、当時衰退していたアイルランドのナショナル・パスタイムズ（national pastimes）を復活させるために、1884 年、ゲーリック・アスレティック協会（Gaelic Athletic Association、以下 GAA）が設立される。GAA はサッカーやラグビーなどの英国式の近代スポーツへの参加や観戦を禁止する極端な規則を定め、アスレティック大会の運営や、ハーリングやゲーリック・フットボールなどのナショナル・パスタイムズを奨励した。このような GAA 活動について Mandle(W. F. Mandle, ‘Sports as Politics: the Gaelic Athletic Association 1884-1916’ *Sport in history: the making of modern sporting history*, University of Queensland Press, 1979)は、GAA が政治的な組織であり、そのスポーツ活動が単に伝統スポーツを保護・養成しただけでなく、他のアイルランド文化を保護するという点でも重要な役割を担っていたことを指摘している。GAA は、現在もハーリングやゲーリック・フットボールなどのナショナル・スポーツを統括する組織であり、これら GAA スポーツは、サッカーやラグビーとの対立関係から、特に北アイルランドではセクト主義を再生産する装置の一つと評価がなされている（Bairner and Darby, ‘Divided Sport in a Divided Society: Northern Ireland’, *Sport in Divided Societies*, 1999）。

アイルランドスポーツ史の先行研究は二つに大別できる。一つは、政治的、文化的に反英国の象徴として扱われてきた GAA を中心とした研究、もう一つは、GAA やサッカーなど、個別のスポーツ史研究である。前者においては、GAA スポーツと英国スポーツが同時代に行われながらも、それらが別々に論じられ、GAA と英国スポーツが衝突する場面に着目されてきた。

日本国内では、近代スポーツ史において非常に強い個性を持つ GAA 研究を中心にアイルランドスポーツ史が検討されている。また、筆者はこれまで、1887 年のアスレティック活動の実態（「*Celtic Times* (1887)にみるアスレティック・スポーツ種目の実相」スポーツ史研究第 22 号, 2009,　pp. 1-12.）や GAA 設立期のハンドボールについて（「ゲーリック・アスレティック・アソシエーション設立期（1884 年-1887 年）のハンドボールについて」体育史研究第 28 号，2011, pp. 21-32.）など、GAA 設立期のアイルランドで行われた近代スポーツについて明らかにした。その過程で、GAA が英国近代スポーツに大きな影響を受けていることや設立当初の GAA は若干の政治色を持ちながらもスポーツ運営を第一の目的としたスポーツ組織であったことを明らかにした。

GAA を中心としたアイルランドスポーツ史は、近代スポーツの伝播に対する抵抗の事例（グットマン『スポーツと帝国』昭和堂、1997）として、また、英国との政治的対立を象徴するスポーツ組織として関心を集めてきた。そして、アイルランドの歴史家はナショナリズムと GAA を重ね合わせ、GAA が行った数々の反英国的な態度を描き出している。GAA と英国スポーツ組織の対立は根強く残り、特に北アイルランド地域において、現在も重要な問題として存在史続けている。

２．研究の目的

本研究では、GAA 設立以前のアイルランドの英国スポーツを、フットボールを中心に検討し、アイルランドスポーツ史の再構成を試みる。そのために、*Sport*(ナショナリスト向けの新聞 *Freeman’s Jounal* のスポーツ版)、*Irish Sportsman and Farmer*（アイルランドで最初の全国的なスポーツ紙）、*Celtic Times*（GAA スポーツの専門紙）の 3 紙を用い、19 世紀半ば、対英国の民衆運動である「IRB」、「土地同盟」、「国民同盟」が活発に活動する 1860 年代から 80 年代の時期に着目し、その時期の英国スポーツと GAA スポーツを明らかにする。

３．研究の方法

本研究では、対象時期のアイルランドで行われた英国スポーツ（ラグビー、サッカー、アスレティクス、ホッケー、クリケットなど）と GAA スポーツ（ハーリング、ゲーリック・フットボール、ハンドボール、アスレティクス）について先行研究及び各スポーツの協会やクラブの年鑑、記念誌、当時の書籍などから明らかにする。次に、全国的なスポーツ専門紙である *Sport*、*Irish Sportsman*、*Celtic Times* の３紙から、それぞれのスポーツ報道について、記事の内容を分析する。以上のことから、民衆運動が活気付く英国併合下アイルランドで、宗主国の近代的なスポーツがどのように受容されていたのか、また、それらの近代スポーツがナショナルスポーツにどのような影響を与えていたのかを検討する。

４．研究成果

（1）フットボールの近代化

アイルランドにおいて、最初に普及した近代的なフットボールはラグビーである。ラグビーは現在、北アイルランドとアイルランド共和国の枠組みを超えて一つの代表チームを作り出している。ただし、実情は中産階級内部における水平的統合であり、階級や宗派を縦断する形の垂直的統合が図られているわけではない（大沼義彦「アイルランドにお

けるスポーツの背景-エスニシティとナショナル・アイデンティティとの間-」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第 89 号、2003 年)。英国で誕生したラグビーがどのようにアイルランドに伝播したのか。

アイルランドにおけるラグビーのはじまりは、ダブリン大学のトリニティ・カレッジ（Trinity College, Dublin、以下 TCD）に 1854 年、フットボールクラブが誕生、1868 年にオリジナルの競技ルールが成文化される。アイルランドではしばらくの期間、TCD 式のフットボールが各地に普及する。イングランドとのインターナショナル・マッチを開催するために、1874 年 12 月、ダブリンや南西部のクラブを統括するアイルランド・フットボール連盟（Irish Football Union、以下 IFU）と、1875 年 1 月、ベルファストを中心とした地域を統括するアイルランド北部フットボール連盟（Northern Football Union of Ireland、以下 NFUI）が設立され、これをもってイングランドのラグビーユニオン（Rugby Football Union）式のルールが採用される。その後、1879 年、二つの統括団体はアイルランド全体を管理するアイルランド・ラグビー・フットボール・ユニオン（Irish Rugby Football Union、以下 IRFU）へと統合される。

特徴的なことは、イングランドから帝国内や他国への近代スポーツの伝播の最初の局面が、主に軍人、外交関係者、貿易商人、宣教師、教師らが関係したのに対して、TCD のフットボールは、イングランドのパブリックスクールの卒業生を中心にした学生たちの自主的なはじまりだった。これは、それぞれのパブリックスクールで行われていたフットボールを持ち込み、ルールを定めた 1846 年のケンブリッジ・ルールの作成過程と類似している。ただし、ケンブリッジや後のフットボール協会（Football Association）のルール作成過程において、出身パブリックスクールのプライドがぶつかり合ったのに対して、TCD の場合、そのような議論は見られない。また、ルールの成文化に主要な役割を果たしたイングランドのラグビー校出身のバリントン（Charles Burton Barrington：1848-1943）は、ラグビー校の象徴的なプレー、ハッキングを禁止し、プレイヤーズ・ファーストのルールを作成した。

TCD のフットボールクラブは、自分たちのルールを当時、毎年発行されていた「アイルランドのクリケットのハンドブック（*Handbook of cricket in Ireland*）」を通じて、広報してきた。しかし、1874 年から TCD のルールは掲載されず、1876 年からは、ラグビーユニオンのルールの一部が掲載されている。このように、アイルランドでそれまで中心的な役割を果たしきた TCD のラグビー関係者たちは、インターナショナル・マッチを境に自分たちで作り上げたフットボールのルールを破棄し、ラグビーユニオンのルールを採用することとなる。このルール変更に関してアイルランドでどのような議論があったのかは明らかにされておらず、管見の限り、ルール変更に反対する記述はなく、ほとんど無批判に受け入れられたようである。TCD のフットボールクラブ関係者が中心的役割を果たしていた IFU は、オリジナルのルールを守ることなく、ラグビーユニオン式のルールの普及に乗り出す。この構図は、英国政府からアイルランド統治のためにダブリン城に設けられた総督府のような役割を担っていたように思わせる。TCD ルールの担い手であったアイルランドの中産階級以上の人々にとって、そのはじまりがたとえ自分たちで作り出したオリジナルのフットボールであっても、イングランドが中心的役割を果たすインターナショナル化のコンテキストに組み込まれる中で、IFU は英国のラグビーユニオンの出先機関のように機能した。

IFU と NFUI が合併して誕生した IRFU も、スポーツの官僚機構として、それ以上の働きを示さなかった。つまり、IRFU は見かけ上は全アイルランドを表象しながら、ナショナリズムやアイリッシュ・アイデンティティを理解する上であまり大きなインパクトを与えなかった。それは主に社会の中産階級以上の限られた人々によって運営されたこととともに、地域を統括していた IFU や NFUI の権限を残す形でアルスター、レンスター、マンスター、コナートの各地域に支部を作ったことも大きな意味を持った。IRFU の役員には地域のバランスが考慮され、地域対抗の定期戦や地域内のカップ戦など、代表メンバーの選出以外は地域の支部に裁量が与えられた。このことは IRFU 設立の目的であった組織的な代表チームの強化という点で、マイナスの要素を持っていた可能性もあるが、大会の開催や新たなクラブの誕生などアイルランド各地域でのラグビーは活発化する。IRFU は全アイルランドをコントロールする組織というよりも、アイルランドの 4 つの地域の集合体として機能した。ラグビーの担い手は主に中産階級の人々であり、この水平的な統合に加え、IRFU の 4 つの支部を中心とした運営形態が、政治的に分断されてもなお、全アイルランドを代表するスポーツ組織として存続することとなる。

（2）社会的エリートの役割

19 世紀のアイルランドは、16 世紀以降に入植・定着した少数のプロテスタントが地主層を形成し、圧倒的多数のカソリックに対し、政治、経済、宗教など様々な領域にわたって優越した地位を築いていた。近世を通じて、プロテスタントはカソリックに対して、きわめて植民地的な社会構造を作り上げていた。1800 年の連合法（Act of Union）以降、両王国議会の合同により、立法上・司法上は連合王国の一角を占めることになったが、行政的にはロンドン政府が任命する総督の統治権に服し続けた。このように二重の植民地的性

格が連合王国のもとで継続したがゆえに、アイルランド側から、とりわけ法的・制度的かつ文化的に差別を受け続けるカソリック被支配層から、こうした状況を打破しようという動きが絶えず生じた（山本正「世紀転換期のアイルランド問題」木村和男編『世紀転換期のイギリス帝国』ミネルヴァ書房、2004 年）。

文化面でも連合王国への同化に抵抗する動きがみられる。1890 年代にはウイリアム・バトラー・イエイツを中心に、アングロ・アイリッシュ文芸復興を開始、この活動はアイルランド語の復活を目指すゲーリック・リーグ（1893 年設立）へと展開していく。スポーツの場面では、1884 年に GAA が設立され、イングランドのスポーツを禁止し、ハーリングやゲーリック・フットボールのような、かつてアイルランドで行われていたスポーツの復活を目指した。最初のパトロンであるクローク大司教は、「ローンテニス、ポロ、クロッケー、クリケットなどのような外国で生まれた素晴らしいフィールドスポーツはそれなりに優秀ではあり、健康的なスポーツではあるが、この地の独特さはなく、やはり外国のものだ」と指摘し、当時のアイルランドでブリテン島生まれのスポーツが普及しつつあることを悲観している。

19 世紀に入ると様々なブリテン島生まれのスポーツがアイルランドで行われている。例えば、カウンティ・キルデアのクロンゴウズ・ウッドカレッジ（Clongowes Wood College）では、ジェイムズ・ジョイスやナショナリストのリーダー、ジョン・レドモンドがクリケットをプレーしていた。アイルランド自治のために活動したチャールズ・スチュアート・パーネルは少年時代やケンブリッジ在学中、クリケットをプレーした。このようにアイルランドの著名な人物たちが、イングランドの代表的な近代スポーツ、クリケットをプレーしている。また、高等教育機関である TCD では、クリケットをはじめ、フットボールやアスレティクス、漕艇などイングランド産のスポーツのクラブが組織され、卒業生はアイルランド各地にスポーツを広めた。他にも、連合王国の駐屯地や大都市など、ブリテン島の人々のコミュニティがあるところで、クラブが結成される。

近代スポーツのアイルランドへの伝播、普及過程について、ラグビーやクリケットなど、各種目の先行研究で詳細に叙述されている。これらは近代スポーツを象徴する統括組織に焦点を当てた、いわゆる協会史あるいはクラブ史が中心となっている。これら先行研究を参考にしながら、一人の人物に着目し、これまでの組織や種目中心の歴史叙述とは異なる視点で、アイルランドスポーツ史を検討する。そのために、アイルランドのラグビーの父と称されるバリントンのスポーツライフを明らかにする。

バリントンは、イングランドのラグビー校で学び、TCD で学生時代を過ごした。TCD では、フットボールと漕艇に打ち込むとともに、アスレティッククラブの運営に携わる。特にフットボールクラブでは、3 シーズンキャプテンを務め、それまで様々な形式で行われていたフットボールのルールを成文化し、ポジションの概念を導入するなどの改革を行った。漕艇では、ヘンリー・レガッタに参加し、ヴィジターズカップで優勝するとともに、そこで行われていたエイトをアイルランドに導入している。TCD 卒業後も、選手として漕艇を続け、ヘンリーで輝かしい成績を残し、アメリカでの国際試合に参加している。また、地元リムリックに戻ってからは、フットボールや漕艇、アスレティクス、ゴルフのクラブを設立、その運営に携わり、近代スポーツがアイルランドの地方都市に普及する基礎を築いた。

このようにバリントンは、TCD で行われていたフットボールを、ラグビー校の形式を参照しながら、官僚化、合理化、専門化を行い、オリジナルのフットボールを作成するとともに、近代スポーツの概念を持ち込んだ。選手としては一つの競技に専念するのではなく、様々な競技に関わり、一線を退いた後も運営やカップを寄贈するなどの形でスポーツ活動に関わっている。アイルランドのエリート層はイングランドで行われていた近代スポーツをアイルランドに持ち込むとともに、クラブ運営においても、その知識や社会的階層のつながり、金銭面など近代スポーツの組織を地方で作る上で、重要な役割を果たしている。イングランドからアイルランドへの近代スポーツの流入に関して、鉄道の敷設や用具の大量生産など社会的な要因のほか、バリントンのようなエリート層も一定の役割を果たす。

アイルランドにおけるスポーツは、ナショナリストと非ナショナリストの対立のコンテキストの中で述べられる。ラグビーやアイルランドのナショナルスポーツはそれ自体が社会階層を表象する。バリントンのスポーツライフを検討する作業の中で、彼が様々なスポーツ活動に携わっているにも関わらず、ナショナルスポーツを統括する GAA とのつながりを示す記録は見られなかった。アイルランドで独立運動や社会運動が活発になる時期、GAA は政治運動との結びつきを強めるが、一方で、バリントンのようなエリート層はクラブや協会の設立といった近代スポーツのシステムを持ち込み、イングランドのスポーツをアイルランドに定着させていった。

（3）ナショナル・パスタイムズから近代スポーツへ

ナショナル・パスタイムズを保護・要請するために、1884 年に GAA が設立される。本研究では、黎明期の GAA のスポーツ活動に着目し、当時、盛んに行われていた GAA によるアスレティック大会とハーリングとゲーリック・フットボールの最初の全アイルラ

ンド選手権大会の実態について検討する。
　黎明期のアスレティック大会の跳躍種目や投擲種目は、GAA 設立以前からアイルランドで行われてきた種目とほとんど変わらない。したがって、アスレティック大会の実情は、GAA が当初目指していたアイルランドに古くから伝わる跳躍種目や投擲種目を多く取り入れた競技形式ではなかった。
さらに競走種目に関しては、英国のアスレティック大会と同様の種目を中心に行われていた。換言すると、この時期の GAA のアスレティック大会は、アイルランド的なものではなく、これまで行われていた英国式のアスレティック大会を模倣したものだった。ただし、*Celtic Times* の記事では、英国式のアスレティック大会を実施することを批判し、アイルランドの伝統的な跳躍種目や投擲種目を導入すべきであると主張している。GAA は設立後すぐに禁止条項を制定し、英国式のアスレティッククラブのメンバーを排除したが、黎明期に行ったアスレティック大会はこれまでアイルランドで行われていた英国式のアスレティック大会を模倣していた。
　ハーリングやゲーリック・フットボールについて、設立からわずか 2 年で、全アイルランド選手権大会を開催したことは、黎明期 GAA にとって重要なポイントだった。最初の選手権大会は、カウンティ間の対戦のみが注目され、大会を辞退したカウンティの多さから、全国大会を実施したことのみが評価されてきた。しかし、この時期の新聞を丹念に読み込むと、大会参加を辞退したカウンティにおいても、毎週予選が行われており、パリッシュルールなどの規約が、厳しく適用されていたことが明らかになった。
　黎明期の GAA はこれまで、アスレティック大会の運営によって、アイルランド全土に組織を拡大したとされるが、ハーリングやゲーリック・フットボールも一定数行われている。アスレティック大会は各クラブや地域が主催者となって、年一回程度開催されるのみである。しかし、ハーリングなどは、パリッシュルールの存在、対外試合や地域内でのトレーニングマッチなどにより、年間、かなりの時間、同じ地域の人々が集まる時間を提供した。このように、黎明期 GAA のハーリングとゲーリック・フットボールは、地域にクラブを誕生させるため、人を集める機会を提供する場として重要な意味を持っていた。また、そのクラブや大会の運営方式は、英国の近代スポーツの方式を取り入れた形式だった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
1. 榎本雅之、世紀転換期アイルランドにおけるエリート層のスポーツライフ-アイルランドラグビーの父 C. B. バリントン（1848-1943）に着目して-、彦根論叢、査読無し、第 408 号

〔学会発表〕（計 4 件）
1. 榎本雅之、19 世紀後半アイルランドにおけるエリート層のスポーツライフ-アイルランド・ラグビーの父 C. B. バリントン（1848-1943）に着目して-、日本体育学会、2015 年 8 月 26 日、国士舘大学

2. 榎本雅之、アイルランドにおけるラグビーのはじまり-トリニティ・カレッジのフットボールクラブ誕生（1854 年）から IRFU の設立（1879 年）まで、日本体育学会、2014 年 8 月 27 日、岩手大学

3. 榎本雅之、アイルランドにおける近代スポーツの展開、関西アイルランド研究会、2013 年 9 月 21 日、大阪経済大学

4 榎本雅之、黎明期 GAA のゲーリックゲームズ-第一回オールアイルランドチャンピオンシップスを手がかりに-、体育史学会、2013 年 5 月 11 日、明治大学

〔図書〕（計 1 件）
榎本雅之、アイルランドにおけるラグビーのはじまり-トリニティ・カレッジのフットボールクラブの誕生（1854 年）から IRFU の設立（1879 年）、130-151、藤井雅人、ビットマン・ハイコ、和田浩一、榎本雅之、佐々木浩雄、藤坂由美子、寳學淳郎編著、体育・スポーツ・武術の歴史にみる「中央」と「周縁」、2015 年

６．研究組織
(1)研究代表者
榎本雅之（ENOMOTO, Masayuki）
滋賀大学・経済学部・准教授

　研究者番号：
40515946